慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ーヂュネーヴ住民の書翰」に現れたるサン・シモンの思想
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.6 (1928. 6) ,p.826(110)- 873(157)
JaLC DOI	10.14991/001.19280601-0110
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280601-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「一ヂユネーヴ住民の書翰」に現れたるサン・シモンの思想

小泉順三

一

エングルスは「空想より科學への社會主義の發展」に於いて、サン・シモンが「佛國革命を階級闘爭と認め、而も、それが單に貴族とブルジョアとの間でなく、亦、貴族及ブルジョアジーと、無産者との間に於ける階級闘爭と認めた事は一八〇二年の當時として最も意義の多い發見であつた云々」として、サン・シモンの卓見を賞讃してゐる。

この一八〇二年の時の著作が即ち「一ヂユネーヴ住民が同時代の人に與へた書翰」である。又同時にこれがサン・シモンの處女作であつた。

然し、上述のエングルスの見解に對しては反對する人もある。例へばフリドリヒ・ムックルの如きはそれである。彼の著「サン・シモン、彼の生涯と著作」に於いて、「熾烈なる經濟的闘爭時代に當つては、この反目の存する事が、敏感なる人の眼に付くに相違ないのは自明の理である。之れと軌を一にして、フランス革命時代、殊に、國民議會時代には、運動の經濟的方面が徹底的に認められた事は、一目瞭然であり、此の點は強調されても良い事であらう。夫れ故に、サン・シモンが「一ヂユネーヴ住民の書翰」で、革命は貴族對ブルジョア及無産者間の階級闘爭と解したのを見て、エングルスが、最高の天才的獨創だと稱揚したのは、不穩當な贊辭である」（註一）と云つてゐる。

私は、此の革命の經濟的内容は既に一七八九年に革命の潮流の觀察者のすべてに、明瞭にされて居たと云ふ、ムックルの説に贊成するものである。然し、他に同樣の觀察者が存在して居つたとしても、「サン・シモンがそれらの觀察者と並行する事には少しも差支はない。」しかのみならず、この著がサン・シモンの思想の出發點となつてゐる事から考へても、この著作研究の價値は前述の理由によつては少しも破損されないと思ふ。今此の著の内容を吟味するに先立つて、サン・シモンの生活の如何なる部分がこの著作に織込まれてゐるかを調べる事も無駄でないと思ふ。

二

サン・シモンは、一八〇一年八月七日に突然、シャングラン（Alexandrine-Sophie Goury de Champ Grand）と云ふ彼と同樣に奇を好む娘と結婚した。彼が突然結婚したのには次の如き理由がある。サン・シモンは、この頃彼の饗應の光を增すために、結婚しやうと決めて居つた、其の機會に、彼の古い戰友のシャン・グランが、丁度、何も財産を殘さずに其代りとして、彼の娘をサン・シモンに托したのであつた。そこで、彼は、最初はシャン・グラン嬢に共同に生活して彼の家の支配をしてくれと申出た。然し、彼女はそう云ふ狀態の不便な事を躊躇なく彼に示したので、彼は彼女との結婚を諾し、彼女に年金一萬法を與へる約束をした。彼女にはサン・シモンが多くの文學者と交際が

あつた如く、文學者や美術家中に多くの友人を持つて居つたので Gretry や Alexander Duval 等は二人の結婚の證人に立つた。(註二)

そして、此の結婚と同時に、常軌を逸した華美な生活が初められた。彼のサロンには科學者、文學者、藝術家、社交家達が集つて來た。Pierre Leraux の如きも其一人であつた。この有樣は丁度、ドルバックが毎週日曜と木曜の兩日にサロンを開いて、エルヴェシユウス、ディデロー、ルソー、グリム、ダランベール、ネージョン等を招き、哲學文學を主題として會談に時を費したと同樣であつた。そして「革命は諸々のサロンに於いて、第一に、ドルバックのサロンに於いて、十八世紀に孕まれた」といふデボーリンの批評程の重要性を、サン・シモンのこのサロンに與へることは出來ぬとしても、ドルバックに與へられた「哲學の家の主人」(Maître d'hotel de la philosophie) なる異名は直ちに、そのまゝサン・シモンに適用する事は出來た。(註三)

サン・シモン自身の言葉を藉りて結婚の理由を説明すれば、「余は、この結婚をば、學者研究の手段として利用した」のである。然し、この經驗は甚だ首尾の悪いものであつた。と云ふのは彼が招待した學者は話すより喰べる方が多かつたからである。學者達は彼等各自の仕事が終つてからサン・シモンの家を訪れたのに對して、サン・シモンは專ら、自分の仕事を始めるために彼等を招待した譯であつた。この事については、サン・シモンがずつと後になつて Lion Halévy に次の如く語つてゐる。

「余の呼びし學者、藝術家は多量に喰べて、少し話した。食事後、余はサロンの片隅の安樂椅子に腰を下しに行つた。そして、傾聽した。不幸にも、時間の四分の三は冗談しか聽かれなかつた、そして余は居睡をやつた……」と。

かくの如く、この試みは失敗に終つたが、この時代の彼の生活は、社交に、研究に、實にめざましいものであつた事は彼の次の如き言葉によつて、よく、之れを窺知ることが出來る。曰く「余は科學を獲得せんがために余の財富を使用した。余が財囊を開いて教授等を、もてなした佳肴美酒、丁寧なる禮節は、余をして、余の希望するを得たあらゆる便宜を得させた」と。(註四)

然し、彼が、自己のサロンに籠つて居睡をし、談笑してゐる間に、彼の財産は消失して了つた。少くとも、其の大部分を失つて了つた。かくて、サン・シモンが自ら研究し又他人を研究してゐる間にかゝる高價な經驗に結末をつけるべき時が到來したのである。「此の經驗は一年續いた、その年の終に、余は余の部屋と余の妻とに暇をやつた」と。

此の結婚の終末に關しては種々なる風説が存在してゐる。即、G. Weill は一八〇二年、五月スタール夫人の著作を讀み且スタール氏の死を知つた彼は、結婚、共同の仕事に從事する事の出來る夫妻は結び付けられねばならぬ事及彼の運命と協調しなければならぬ女を發見したから離別は避け難いといふ事とを彼の妻に書送つた」(註五) と云ひ、ムックルは、サン・シモンがかくの如く離婚を決行したのは一時の感情の赴くまゝに刹那々々全く無雜作に喰ついては離れる奔放淫恣の結果であつたらうか、或は、より深い實質的な根據があつたのであらうか。それは實に後者であつた。……この優秀な婦人(スタール夫人)と相携えて「榮譽の聖壇が、頂上に聳えてゐる險山をよぢのぼる」のはサン・シモンにとり、考へても、胸の躍る事ではなかつたか。彼は夫人の著を讀んで感激傾倒して了

うたに相違ない……彼は決然臍を固めたのである。自己の高遠な使命の確信に夢中になつて責任も何も打ちすてゝ彼は自己の胸を妻に打明けたのであつた、云々と述べてゐる。(註六) 然し、かゝる見解は、ムックル自身も云ふ如く眞僞を究明する事は不可能であるし、又、あまりに狂氣じみた結合方法としも我々は信を置き得ない。それよりも寧ろ「サン・シモンが離れたのは家計からであつて、妻からではない。この離婚は感情によりも、より多く家政上の事件に懸つてゐる」と見るべきであらう(註七)。從つて、彼が、獨りになつたのは、財産の決算をするためか、又は、全く破産して了はぬ前に、彼の實行方法論の規則に一致する新らしい經驗に手をつけるためか、それとも、近く迫つてゐる破産に自分の妻を引こまぬために離別したのではなかつたかとも想像出來るのである。

Maxime Leroy は此の離婚をば、アメリカ獨立の報を耳にするや、被征服者の解放を叫んで、愛する夫人の姪娠せるをも見捨てゝ、佛國を脱走し、帆船を買ひ、大洋を横切つてワシントンに味方したラファエット侯の態度に喩へてゐる。社會人が家族的感情や愛の感情に打勝つたのだと評してゐる。さもあらばあれ、ワシントンは離婚の當時泪をためて離緣狀に署名した。Hubbard をして云はしむれば、此の涙は「愛と、涙を、智と分別とのために永久に犧牲にする」と云ふ哲學者の全生涯を説明するものであつた。尙サン・シモンは離婚に際して、彼の妻に一萬法の年金を續けたいと希望したが、彼女はこれを拒絶して、自分の生活は自分で働いて得ると答へたと云はれ、又、これと反對に、ずつと後に Baur 夫妻(サン・シモン、夫人は後に Baur 夫人となつて、小説と劇とによつて有名になつたと傳えられてる)が、貧窮時代のサン・シモンを救ひたいと申出たが、サン・シモンは之れを斥けたと Gustave d'Eichshal によつて云はれてゐる。然し彼の妻が Baur 夫人になつた事についても、又種々な臆説に我々は出會するのであつて、或人は、サン・シモンは、シャン・グラン嬢にとつて自分を一介の父親にすぎぬことを許容したと云ひ、他の人は、彼は息子を得るために自分の妻を有名な數學者に任せた、然し、生れた子供は期待に反して中位のものであつたと云つてゐる。(註八) ともかく、幸福は常に人間から離れる事を喜んでゐる。サン・シモン夫妻も此の悲みを味ひながら一八〇二年六月二十四日法律に從ひ、双方合意の下に離婚の手續を完了したのである。

サン・シモンは、かくてシャン・グラン嬢との約十ヶ月間の短い結婚生活が終るや否や直ちに Coppet に赴いて、其年の五月に夫を失つたばかりのスタール夫人を訪問した。此の訪問が離婚後直ちに行はれてゐる事によつて、前述せし如く、世人はサン・シモンとスタール夫人との間に何等かの密接なる交渉を想定して、そこに、彼の離婚理由を求め、更に、之にさまゞゝの臆説を加へてゐる。世人は、この訪問に際じて、サン・シモンがスタール夫人に云ひそうな言葉を彼に云はせてゐる。曰く「夫人よ、あなたは私が最も非凡な男である樣に世界中で最も非凡な女である。二人の間から、我々はより一層非凡な子供を産むことは疑ひないだらう」と。又、一八九二年八月の "Le Temp" によれば、サン・シモンは結婚の夜を輕氣球の上で過さうと申出たと云ひ、Benoit Malon に至つては其著(Histoire de Socialisme)に於いて、此の閨秀とサン・シモンとは一人の男兒を擧げたけれども、勿論、サン・シモンの空想を裏切つて「極く非凡ではない」兒であつたと述べてゐる位である。然し、他方 Michaud によればスタール夫人はこの提議を只微笑を以つて迎へた丈だと云ふことである。何

れにしても臆說は常にそれを確認すべき何等の證據も持たないものであるからして、我々は今、かゝる言說の眞僞究明は差控へてもつと重要な事實を語らねばならぬ。と云ふのは、サン・シモンが Coppet に旅行したと云ふ事には他に充分な理由を見出す事が容易であるからである。

それは、スタール夫人の思想である。Leroy は次の如く云つてゐる。類似せる起源、二人は二人とも十八世紀のサロンから又改革者達の集團から出てゐる。心理の類似、サン・シモンの如く、スタール夫人は更新について異常なる希望を有してゐる、彼女は永久の運動を愛してゐる。彼女の好奇心は激烈であつた。そして、又サン・シモンと同樣に、彼女は屢〻會話態で書いた。其上最も深いものは思想の類似である。サン・シモンの如く、スタール夫人は哲學者である。Cabanis は夫人の友人であり、夫人は人間の完成を信じて居る。彼女は青年の心を浪漫的なキリスト敎に導き、すぐ後に、シャトーブリアンの陰欝さに誘入れる樣な氣致でなかつた。……進步を信ずると云ふことに彼等を連絡する面影があつた、而して、この面影にはサン・シモンをして突然 Coppet に赴かしめる共鳴の祕密が與へられてゐたのであらう　と（註九）

スタール夫人は、これを箕作博士の言を藉りて云へば「ネッカー夫人の娘アルネ・ルイ後スタール夫人として、フランス文學史に有名なる婦人にして、ナポレオンのために二敵國をなせし程の一代の才媛なりしかば、ネッカー夫人のためには綿上花を添えしものと云ふべく、其父母の誇榮の心を輝かしゝこと幾層なりけん」と（註一〇）當時夫人は既に初期の作である、Lettres sur J. J. Rousseau の外に De l'influence des passions sur le bonheur des individus et des nations (1976), De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales, 1800. を公刊して居つた。そして一八〇二年、即ちサン・シモンの訪問した年には、女權論の法典とも云ふべき、感情高潮せる著作 Delphine を著して居つた。夫人は彼女の所謂「私の著作にはボナパルトに關しては一言も言及しなかつた。而も、そこには最も自由なる感情が力强く說明されて居た」と信じて居る前記 "De la litterature" に於いて、古代文學優れりや近代文學優れりやの喧しい問題を解說するに當つて、科學及精神生活の侵々乎たる進步發達を引證し、全然十八世紀の精神を以つて、後者の優越を斷言してゐる。而して人性の無限の完成能力を確信してその時代の文化的必然の趨向を達觀し、青年の如き大膽さを以つて、新時代の到來を豫言せんとしてゐるのである。彼女は革命を呼ぶに野蠻なる語を以つてしたが、革命による夫なる自由の成功には感激して居つた。然し、同時に革命が殘した社會改造と云ふ建設方面に於ける社會自體の深く苦惱を見逃さなかつた。彼女はコムドルセーの考へた樣に、社會を指導すべきものを歷史に求め、思を遠く中世の昔に走らせて、社會的利害のあくまで調和した時代を翹望した。曰く「若し幸福にも、我々が北方民族侵入の時に於ける如く、哲學體系、善に對する熱誠有力にして公平なる立法を見出すとするならば、過去のキリスト敎の場合と同樣に、革命の戰勝者と戰負者とを結合しうる思想に於いてこそ」と。この書、この思想をよんだサン・シモンの胸には、恐らく、スタール夫人の憂へてゐるものは俗世に憂る哲學である。貧血症になつた革命殘存者の幾人かは血を恐れるあまりカソリック敎の信仰をもつた王を求めてゐる。余はこれに組みせぬ。恐らくスタール夫人も不同意であらう。百科全書學者の思想を新時代の爲に語り、行ひ且つ進步せしめぬ

ばならぬ。夫人の余を援助する事は確實であるとの希望と豫期とが張つた事と思はれる。夫人がこの書の成功について「一八〇〇年の春の頃、私は文學に關する著作を發行した、此の著の得た成功は全く社會に於ける私の信用を取戻した。私のサロンには再び人がつめかけた」（註一一）と語つてゐるが、前述の如き熱情に馳られたサン・シモンも恐らく此の中の一人に數えらるべきであつた。然も、夫人自ら告白してゐる如く彼女にとつて何よりも面白いものであつた巴里の噂を話柄とする訪問客の多い中で又サン・シモンが頗る種を異にした訪問客の一人であつた事は之れを推察するに難くない。

もう一つの同意點は夫人のナポレオン觀に存したと云ふ事が出來るであらう。夫人に從へばナポレオンは知識進歩の大敵であつた。即、曰くボナパルトの政治の特長をなすもの、そは、人類のあらゆる知識的富に對する根深い輕侮である。即ち眞理、精神的權威、宗教、熱誠、これこそ、彼の眼には、彼が常用せる言葉を、私が、こゝへ使用するならば『大陸の永久の敵』である。

彼は人類を暴力に又、詐術に屈服せしめんと欲した。又すべて自己以外のものを、無智なるもの暗愚なるものと呼ばんと欲した。英國民は特に彼を激怒せしめた。何故かなれば英國民はナポレオンが以つて、なすに不可能であるとした物、即ち、正直を以つて成功をうるの所以としてゐたからである。世界に於けるこの光明は彼の登位の即日から彼の眼障になつた。而も自己の甲兵を以つてしても英國を害することの出來なかつた彼はあらゆる「詭辯と云ふ砲」を英國に向つて放つ事を止めなかつた。

かゝる暴君には自由は無價値無存在物である。自由の友たる人々こそ、何よりも彼のよろこばざるものであつた。何故かなれば彼等は少數ながら輿論の製作者であつたからである。

彼が人に、しかも私の友人に、話したことによく耳をとめて聞き給へ。曰く「フランス國民の幻想を捉へるためには三ヶ月に一度何事かしなければならぬ。フランス國民にとつては、進展しないものは何にてあれ失はれる」と。これこそ我がボナパルトの全思想の要約であると信ずと。（註一二）夫人の言や痛烈である。夫人の眼に映じたナポレオンは國民を玩具視するもの、眞理を永久に破壞するものであつた。私は、この點からしても又、サン・シモンと夫人との間に一眼の相通ずる何者か換言すれば、ひそやかな共同戰線の敷設があつた事と思ふ。

かくの如く思想的に相似た二人が相會つたのである。勿論、サン・シモンは、この訪問に於いて無聊を感じはしなかつた。夫人は彼と談話する事を甚だよろこんだといふのはあり得る事である。前言せし如くBenoit Malonが集めた傳說によると、この夫人の彼に對する好意は、ベンジャミン・コンスタンが居つたにも拘らず、二人の間に子を設けた程立入つたと迄云はれてゐる。然し、偶然、求婚がサン・シモンの唇から洩れたにしろ、又單なる談話が交はされたにしろ、何れにしても其終局は明白すぎる程明白であつた。Weillによれば、Copperの女主人は彼との結婚を拒絕した。そして、サン・シモンの所謂彼の崇高の出來心なるものは微塵に粉碎されて了つた。サン・シモンは夫人と別れて以來再び彼女と遭ふ事はなかつたのである。

失望したサン・シモンはヂュネーヴに赴いて數週間をそこに費した。この地に於けるサン・シモン

は、豫期した夫人から助力を拒絶されたので只一人で、彼の最初の著作である Lettre d'une habitant de Genève à ses contemporaines を書いたのである。而して此の著が Rodrigues の云ふ如く「スタール夫人の愛を得んがために著述されたと想像する事も、亦ムックルの様に「この尊敬すべき女性の同情をうるを目的とした小著である」と觀ることも出來るが、要之、一八〇三年に出た「ヂュネーヴ住民の書翰」の完成を云ふ事はサン・シモンの求婚時代に起つた一事件として傳記編者にとつて重大な二要素であると見るに止める程度のものであらう。(註一三)何んとなれば、この著が求愛の目的を有して居つたと云ふ說は前述せし種々なる異說と同樣に何等證據があつて確認されてゐるのではない。しかのみならず、その反證を見るべき事實が存してゐる。それはこの著の騰本は Coppet の女主人の敵である第一統領の許へ、手紙を一共に、サン・シモンによつて送られてゐると云ふ事である。

但しサン・シモンは謄本の外に其原稿まで Agasse なるものによつてボナパルトの許に送らうとしたが、革命曆十二年の第七月 Agasse にその返還を求めてゐる 其言に曰く「余は急速に人の注目を得やうと云ふ余の計畫を放棄する……余はそれに伴ふところの概說のために努力しやう」と(Weill, op cit p 35 Note)

而して、彼がナポレオンに對して賞讃措かざるが如き言說は屢〻彼の著作に於いて吾人の眼に觸れる所であつて(註一四)例へば「第十九世紀科學的研究序論」の第二卷第二十二章「榮光の寺院」に於ける「かゝる宇宙的王國は決して世襲されない。此王國は遊星の全生涯中只一度しか存在しないであらう。而して其主たるべき人は『ナポレオン』である。人類に法律を與へるためには一切の權力が彼の掌中に統一されてゐることが必要である」といふ彼の言葉を、よめば彼がナポレオンに對して少からぬ讃仰心を抱いて居つた事は疑はれない。然し、又、これと反對に、反ボナパリスト的の言說も發見するに難くないのである。我々が了解に苦むのはこの點である。

此間の矛盾を解き得るものは恐らくサン・シモン獨りのみであらう。故に Emile Faguet は云ふ「細微の思想に於ける矛盾、ボナパリスト？共和主義者？帝政主義者？ナポレオンの銅像をつくるために Saint-Bernard 山を切開かねばならぬと云ひ又ボナパルトを狂暴なる愚人として取扱はねばならぬと云つた事を思合はせば彼が何れであつたかを云ふことを諸君は知らぬであらう云々」と(註一五)然し、彼の全思想から推測する事が許されるならば、サン・シモンの云ふ「ナポレオン」は現世のナポレオンと云ふより、寧ろ、現世のナポレオンを神の祭壇に上せたもの、換言すれば、私心なき、自らの功名心を滿足せしめんがためではない科學的專制君主であると云はねばならないであらう。武力の專制君主はサン・シモンのよろこばざる所であることは云ふ迄もない。この人類知識の發展を阻止する敵であると見る點に於て、サン・シモンとスタール夫人との間に協力の紐帶が發見されたけれども、サン、シモンは一方に於ては、ナポレオンを科學の敵と認め、他方には統一の典型と見る二つの立場にあつたのである。

とまれ、それは一八〇二年の事であり、此時サン・シモンは既に四十才を過ぎて居つた。(註一六)從つて、ラブオンテエヌやルソーと等しく彼も亦筆を執ることの甚だ遲い人であつたと云ふ事が出來る。

彼は此の著の初めに「余は最早若くはない。余は觀察と反省とを重ねた」と述べてゐる。旅行家から兵士、兵士から投機人其の次には、無機體有機體の研究に沒頭して進んで學者の特志的弟子となり、自力の許す限り最も進歩せる思想の潮流に身を置き、且つ大革命の暴風雨には一度は最大の不幸にまで陷入つたが、よく單なる觀察者たるの地位を維持し得た彼が、かゝる信念の下にこの著を書初めたとしても我々は彼の信念に充分なる理由を見出すことが出來る。實に四十二の年月より得たる彼の經驗と知識を一擧にして披瀝したものがこの著であつた。

註一　ムツクル著高橋正男氏譯著、サン・シモンの生涯と其の思想體系二〇五頁
註二　Weill, G, Saint-Simon et son oeuvres, p. 17.
註三　井上滿氏譯デボーリン著フランス唯物論史、一二四頁
註四　Maxime Leroy, La vie de comte de Saint-Simon p. 210
註五　Weill, op, cit, p 17-18.
註六　ムツクル著前掲書、二四—二六頁
註七　Maxime Leroy, Le vie de Comte de Saint-Simon, p. 212,
註八　Weill, op, cit, p 18, Not 1.
註九　M. Leroy, op. cit, p. 215-216.
註一〇　筆作元八博士著フランス大革命史第一卷五二—五三頁
註一一　Staël, Dix amé d'exil chap III. p. 224.
註一二　ibid.
註一三　ムツクル著前掲書、二七頁、Weill, op, cit, p. 35
註一四　Saint-Simon, Oeuvres chorsies vl. I. p 243, 183, 229, 231.
註一五　Emile, Faguet, Politiques et moralistes du XIXe siecle, vol. II, p. 2.
註一六　「ヂユネーヴ住民の書翰」は一八〇五年に書かれ、且この書がサン・シモンの手によつてヂユネーヴで出版されたのは一八〇七年の事であつたが、サン・シモン選集第一卷の序論CVII及同じく第一卷のP 3 Not 1 に記されてゐるが Weill は其著 Saint-Simon et son oeuvres 1894 の Chap II p 35. に於てこの著の發行年月を一八〇三年とし、又 Maxime Leroy は其著 La vie de Comte de Saint-Simon に於ては一八〇三年十月としてゐる(p. 218)

三

Les lettres d'un habitant de Génève à ses contemporains は前述の如くサン・シモンの筆から出た最初の著書である。「然し此の小冊子は出版されたが世間の歡迎する所とならなかつたのと著者自身も死ぬまで、少しも、其の著について語らなかつたので、サン・シモンの死後 "Le Producteur" に彼の學說と著作史とをかゝた Olind Radrignes も此の書について一言も云つてゐず又師の最も古い著作として L'Introduction aux travaux scientifique de XIX siecle の二冊を示してゐる程全く忘却されて居つたらしい」。(註一) 又 Maxime Leroy も「此の著は一〇三頁の小冊子で發行場所も月日も、著者の名もない。甚だ少部數しか印刷されなかつたため、サン・シモンの最後の弟子である Olinde Rodrignes が師の死の數日前に偶然それを知らなかつたならば、此の著は未發見のまゝであり又不知のまゝになつたであらう。サン・シモンは彼の過去の著作について少ししか或は全く話さなかつた」と述べてゐる。(註二) 然し「將來をのみ慮る人は常になされた事物に背いて爲さんとする事

物に向つて進む」と云ふサン・シモンの態度と、この著が世間の耳目を引かなかつたと云ふ二事實が存するにも拘らず、此の著は充分に研究の價値を有して居る。其の理由如何と云ふに Catéchisme des industriels の第四覺書と Nouveau christianisme を除いてはサン・シモンの大哲學が一時に全局面を示してゐるものは、彼の多くの著作中この著作が只一つのものであるからである。Weill は曰く「祭司口調があるに拘らず、この著は閑却さるべきでない。著者の殆んど全部の主要なる思想の萠芽を包有してゐる」と。（註三）

「産業者問答」の第四覺書と「新キリスト教主義」をサン・シモンの思想の要約とすれば「ニヂュネーヴ住民の書翰」は其のプログラムである。後者が出發點を示すものであつたとするならば前者は其の到着點を指示するものであつた。從つて「一八一七年從つて、彼が相當の年配に達した時になつて初めて彼の最初の著述を出した。……其の中には有名な "Parabole" 1819 がある、云々」となす、Palgrave の經濟學辭典のサン・シモンに關する項は甚だ不備なるものと云はねばならぬ。

今、彼が殘した甚だ種類の多い著作を見るに、その根柢には祕やかに統一がさられてあり、從つて著作全體から一つの完全なる全學說の原理と要素を抽出することは容易であるけれども、彼の著作を注意深く研究すれば彼は彼の思想を順々に、科學觀政治觀道德觀と云ふ順序に連續的に述べた後で人生のこの三方面を統一聯絡して、一つの最高概括に於いて、それを要約しやうと云ふ努力の最中に死んでゐるといふことが發見される。從つてサン・シモンの著作自體の性質は四期に、科學的方面、政治的方面、道德的方面、宗教的方面に彼の生涯を分割することが出來る　と云ふ見解をサン・シモン選集の編者は持してゐる。（註四）

即ち、一八〇二年から一八一四年までは、サン・シモンは、特に、科學に身を委ねて居つた。彼は「ニヂュネーヴ住民の書翰」、「十九世紀の科學的研究序論」、「新百科學論」、「天文事務局への書翰」「人類科學に關する覺書」及び「萬有引力に關する研究」を書いた。

一八一四年には、彼の最初の政治的著述である「歐洲社會の改造について」が現れた。而して、政治家及外交家の注意を引いたこの著の後六年間は、日々の出來事や狀況について彼の政治的學說を說明し適用したパンフレットや單行本や小冊子が多く發行されてゐる。

而して「産業體系」の再版につづいて、一八二一年の一月に發行された "L'Appel aux philanthropes" はサン・シモンが政治から道德へと移つた過渡期を示すものであり、又、産業者問答の第四覺書が一八二四年に出て、科學、産業、道德の統一が偉大なる精神で、同樣にしかく大なる心であるものとなつて示顯されるや否や、彼の感情は高唱されて居るが、空漠な言葉使ひで「新キリスト教主義」に於いて衰へた手を走らせて我々に殘して行つた新らしい宗教的感情を抱き初めたのである。（註五）

以上は年代順と彼の生涯の傾向とによる彼の著作の分類であり、大體に於いて、吾人が容易に肯定しうるところである。然し、この分類に於いても「ニヂュネーヴ住民の書翰」文は其の性質から推して特別の地位が許されねばならない。即ち選集の編輯者は附言して「年代的理由のために我々はこの小著をサン・シモンの科學的著作中に置いたが、この著は、寧ろ、其の時期及其の不完全さに拘

らず、宗教的著作の範疇の中に屬せしめらるべきものであらう」と。（註六）而して「ヂュネーヴ住民の書翰」が後期の著作に屬するものであると云ふこの理由は、此の著作を讀む人が直ちに氣づく如き超自然的言辭に富んでゐるがためでは決してなく、人生の三方面の結合した思想が、自然とそこに包括されてゐるによるのである。」

事實、彼はこの第一の著作に於いて、彼が以前から豫見して居り、而してこの最初の著作に於いて豫見し、その上に、いつもより以上の熱誠より以上の献身を以つてではないが、彼の精神や愛情がいよ〳〵熱するに從つて、より以上の努力、より以上の明智、より以上の了解を以つて、終りまで、それを眺めて居つた社會問題の全局面―科學、産業、道德に殆んど混亂のない簡單さで接觸してゐる。然らば如何なる程度に、又如何なる形式にて、サン・シモンの全思想がこの著に要約されてゐるか。

尙此の著の內容は「第一の書翰」「友人の返事」「第二の書翰」「第三の書翰」の四書簡より成つてゐる。而してこの中「第二の書翰」が最も重要である。

註一　Saint-Simon, Oeuvres choisies v.l. I. intro. XVIII

註二　Maxime Leroy, La vie de Comte de Saint-Simon p. 219.

註三　Weill, op. cit. p. 38.

註四　Saint-Simon, op. cit. intro. XIV-XV.

註五　ibid.　XV-XVI.

註六　ibid.　X-X.

四

和蘭の革命を終始其の地に於いて目擊し社會組織の問題を明白にする事は彼の生涯の事業であると考へたサン・シモンは「この目的を達するためには、多くの觀察をしなければならぬ」と決心した。而して、この決心こそ彼の四十有餘年の長い生涯の指針であつた。

今來し方を振返つて見て感激甚だ深いものがあつたサン・シモンは恰も昔の彼の決心に自答するが如くしみ〴〵とした筆致で「余は最早若くない。今日までいろ〳〵觀察もし又反省も經て來た」と述べた。而も今日までの彼がかゝる努力の目的は何んであつたか「諸君の幸福が余の研究の目的であつた」と。從つて、「人類に設立しうると思ふ計畫」を思ひついたサン・シモンは前記のいと靜かな述懷もそこ〳〵に俄然甚だ「奇怪なる提案」「實に背理的な提案」をしてゐる。（註一）即ち、序文もかゝずに、いきなり數行の述懷めいた言葉をかくや否や、サン・シモンは筆勢を更へて直ちに自己の目的を吐露してゐる。

「ニュートンの墓前で寄附を開始せよ。諸君は何人も、無差別に應分の金額を寄附せよ。各寄附者は三人の數學者、三人の物理學者三人の化學者、三人の生理學者、三人の文學者、三人の畫家、三人の音樂家を指名せよ。毎年寄附を新らしく行ひ、同時に指名をも改めよ、然し各人が同一人を指名することは何等制限せずに各人の自由に任せよ。

最大多數の投票を得た三人の數學者、三人の物理學者・・・・等の間に寄附の收入を分配せよ。ロンドンの帝室協會の議長に乞ふて今年の寄附金を管理せよ。次年及其れ以後は最も多大の寄附を行つた人にこの名譽ある職務を負はせよ。

諸君の任命した人々に、彼等が諸君から何等の地位、名譽、金錢を受けないことを要求せよ。然し、個人的には彼等を放任して自由に其力を使用する絶對的な人格たらしめよ』と。（註二）

かくすれば天才は彼に相當した報酬を收受する事が出來る。換言すれば其の能力に應じて報ひられる事となる。而もこの報酬たるや熱烈なる人士の野心の目的となり、然らざれば、人類の平和にとつて有害なる方面に向けられるやも知れぬ天才の努力を自己へ引つける魅力を有するものである。かくて寄附と云ふこの方法によつて、最後に諸君は諸君の文化進展のために働く人々に先導者を與へるであらう』と。（註三）Leroy はこの計畫に於けるサン・シモンの眞意を適切に評して曰く「比喩は理解し易い。そこにはグランベールの弟子を、貴族及有閑者の反對者を認める。サン・シモンは政府を有能者、科學者及美術家の手に置いてゐる。甚だ遍く一八四八年の頃に、非常に大なる力を持つた "capacites" なる言葉はこゝには現れてゐないが、その思想は彼の計畫に吹込まれてゐる」と。（註四）「第一の書翰」は嵐の如き交響樂を我々にきかせてこゝで終を告げてゐる。

此の計畫について友と自稱する彼サン・シモンは書を送つてこの計畫に贊成してゐる。本著の第二部分をなす「友の返事」がこれである。先づ曰く「この思想は人道的であると共に斬新である。この思想が、天才を以つて治者のみならず又被治者をもこめた人類を光明づける炬火であるとしたのは理由のあることである。「何んとなれば若し吾人にして行政のあらゆる部に亘つて政府を指導してゐる思想を詳細に驗討するならば吾人はその思想はすべて天才によつて發見されてゐることを知るであらう。そして天才は被治者のみならず又治者をも賢明にしてゐるからである。而も天才を報賞するに人類を全體として動かしてゐるのは實によく推理された正しい原則によつてゐる。」（註五）この天才を報賞するに人類全體に起たしめるといふことは天才をして人類の一部を代表する特殊利益に狂奔することなからしめ、その結果、特殊利益をしてその力の一部を麻醉せしめるのである。而してこの計畫によつて天才に與へられるものは最高の地位である。與へられた最高の地位を前にしては何人も鼓舞され研究の疲勞を忘却して了ふであらう。「若し、人類が天才に與へる高い地位を學士院の肱掛椅子と比較するならば、人類の選民は學士院會員より以上に甚だ有利な地位に居ることを余は信ずる」。何が故に有利なのか。「天才は最も完全な獨立を維持するからである。彼は何等特殊の考慮によつて阻まられることなく自己の力の全威力を發展さすことが出來る。彼は彼が得た地位を維持するために奮激し、研究眼を以つて先人の研究を調べ、これに勝らんことを期し、爭鬪心を捨てゝ新らしきものを產まんことを希望する。彼の熱心は漸次收獲をあげて彼は人類に進歩をなさしめるといふ貴重なる目的に到着する」。（註六）

然るに學士院の精神は如何。彼等は全く正反對の道程を歩み續けてゐるではないか。ベーコンも云ふ「學者の住所と學問の養成に充てられてゐる種々なる大學や、それに類似した團體の慣習や制度はすべて科學の進歩に反するものばかりである」と。學士院の人々は常に自己の承認した學說を擁護し、自己を眞理受托者の如く思惟する傾がある。彼等は意見を變更する位なら寧ろ自己の主張する絕對眞なるものを攻擊したであらう。彼等は人類の文化や幸福を進歩せしめるよりも寧ろ異說者を非難し之に對して苛酷なる反對者となるに忙しいのである。談論風發の際に如何なる苛酷さを以つ

も、學士院會員は天才を阻害したことか。學士院の精神に隨伴する方法を觀察して見たまへ。諸君は學士院會員が如何に傲慢卑屈を極めて居つたか。如何なる手品を用ひて、人類を開化し得べかりし議論を屏息せしめたかを、彼等の採る手段は迫害か默殺或は笑殺に盡きる。從つて「若し二三人が判斷を少しでも自由に用ふる大膽さを有してゐるとしても彼等は全然孤立で行はなくてはならぬ」（註七）然らば學士院腐敗の原因は如何所にあるのか。他ではない。學士院會員は終身任期であることが一つ、彼等が政府に從屬してゐると云ふことが他のもう一つの原因である。

「獨立を失ひし者から我々は價値あるものゝ生れんことを希ふ事は出來ない。人類進歩の歴史を一見し給へ。彼の傑作を稱せらるゝものは殆んどすべては孤立した、屢々迫害された人に負ふものであることは等しく吾人の知る所である。「學士院會員なるものは殆んど常に肱掛椅子に惰眠を貪り又筆を執るにしても、そはたゞ世に阿るか又は拙劣なる眞理をつくり出すに止まる。」然し、自己の奴隷化を覺らずその地位に在るを深く光榮也と信じ執着の情禁じ難き風情の學士院會員が何物もつくり出さぬとて更に不思議はない。サン・シモンが前記の計畫に於いて年々の改選を主張せしは天才をして學士院會員の轍を踏まざらしめんが爲であつた。卓越せるものは再選せらる。終身たらんと欲せば卓越する以外に道はない。卓越こそ永劫の榮光への正道である。暫く英國を見よ。學士院の歴史を一見せよ。學士院の數と無智とは正比例するものであることは澎湃然と諸君の胸を打つであらう。「英國には決して學士院は存在しない、學士院に幾分類似せる二つの學會があるのみであるに、之れに反して迷信や無智に委かせられてゐる王國には共和國にさへ學士院は充滿してゐる。」

「然し、どこの國が英國以上にあらゆる型の大人物を產んだか。どこの國がより多くの眞理を發見したか。どこの國が、その眞理をより以上勇敢に發表し、より以上敏速に採用したか。どこの國が有益なる發見の創見者をより以上に寛大な心を以つて賞讃したか」と反問するならば「此の島に於て有形なる自由を愛する念と言論の獨立とが學士院を輕蔑し且之れを排斥したのは當然であつた。市民としての英國人は自己の人格の尊嚴を自覺し、學者としては有力なる人に側近して節操を賣り又その庇護の下にのみ漸く存在してゐる團體に參加することを恥ぢて居つたのである」。故にサン・シモンは云ふ「ニユートンの墓が、聯盟の根據が、英國、他國に於いて迫害された天才や學者の避難所と不斷になつて居つたこの國にあると云ふ事は幸福なるかな」と。（註八）余はこの言の中に既に、一八四八年以後のマルクスの英國生活が暗示せられてゐる樣に思ふ。之れに反してフランスの現狀如何。フランスに初めて學士院を建設した專制主義のリシユリユは學者を誘惑するに勳章を以つてし學士會員の地位を以つてし、之れを利用して爲政者の誤れる見解をも是認せしめ輿論制禦の武器とした。フランスが英國の智識水準に上らないのは當然である。伊太利又然るものがある。とは云へ、學士院がそこばくの利益を世に與へた事、及び、其制度は甚だ不完全ではあつたが科學及美術に何等かの利益を產んだものだと云ふ事は否定し得ない又、意氣壯んなる二三の學士院會員の存在して居つた事も認める。然し、前述せし如き惡風は長年月に亘つて彌漫し、學士院の傾向は現代の哲學的見解を距る事甚だ遠いものとなつて了つた。正しい努力勤勉が正當に報ひられないからである。この事はこの事丈で既に科學の發展を阻止するに充分であつた。これはデカルトの云ふが如く科學

上の開拓は世人がこれを理解するにはあまりに偉大なる事柄であるがために實質的利益を以つて報ひられぬ傾向があるためと、加之科學への功献に對する褒賞は普通少數な場合を除けば殆んど常に學問さへもない俗人や貴族の手に委托されてゐるためである。從つて天才窮迫の事實は無數である。（註九）天才をして生計をうるに忙しいがために彼の理想を忘却させるべきでない。救助によつて又報賞によつて激勵されなかつたために、折角の考慮が、どれ丈早熟したことであらうか。而して若し、これらすべての困難にも拘らず、幾人かの天才が名をあげ、且報賞をうけるに至つたとしてもこの報賞は、常に彼等の研究の費用の大部をつぐなひ、よき性能を有する青年を激勵し、又、彼等が富を有してゐない場合に、彼等の欲求に應ずるためには不充分であつた。又現在天才が得てゐる地位或ひは、報賞は殆んど常に彼に一定職務を與へてゐるが、この職務は彼をして多少なりともその研究から遠ざける。それは天才を一つの場所に固定せしめ、そのため、社會事情を見歩いて、以つて新發見をする機會とする事を妨げるからである。かくの如く、天才に報賞を與へる政府の無定見は天才をして反つて彼の將來を不安ならしめるばかりでなく「又かの戰爭或は何等かの財政上の變調はその報賞金の廢止、或は少くとも支拂停止にみちびく事が再三である」。依是觀之「結局彼の研究のためには絶對的獨立を必要とする天才も常に多かれ少かれ彼を報賞する政府に依存することになる。彼は時流を容れなければならぬ。彼は身を委ねてゐる風俗習慣に服從しなければならぬ。彼は自己の創意を大膽に追究する代りに所謂第二次的に考究しなければならぬ。彼は怯る〳〵彼の思想を世に出す方法を考へねばならぬ。彼の本心よりも世人が彼に期待するよりも少く、自己の意を表現するに止めなければならぬ。一言すれば、世人は彼をして彼に與へた粗末なる報賞に對して甚だ高い支拂をなさしめてゐるのである。」（註一〇）ベーコンの語を藉りて云へば「攻擊者から嚴重に保證されてゐる著作を嚴しく批評すれば、彼は直ちに擾亂者改革者として非難されるのである。」

更に又、天才が政府から或は全く、他の個人から特別の恩惠を受けることに同意する場合を考へて見るに、この場合に於いては彼の地位は彼が自ら陷つて卑下のために尚一層甚だ憂ふべきものがある。

もつと大膽にこの事を話さう、「政府に於いて地位を與へられる天才はすべて思想に關してのみならず實際に惰落する。何んとなれば彼等の地位の職責を果すために彼等は人類のために、より以上必要な研究を等閑に附すか、或は、若し、彼等が天才の衝動を拒否することが出來ないとすれば、彼等は彼等の地位のための職務を往々にして等閑視するであらうからである」（註一一）。この例にはニュートンの如き人すら洩れてゐない。

結局天才に與へらるべき地位は唯一しか存しないのである。

「吾人は甚だ廣くすべてに關係を有する利害を彼等に指定する如き唯一の地位に天才を置くことによつてのみ人類にとつても政府及天才にとつても等しく憂ふべきこの二重の立場を避けることが出來る。」「天才は自由に放任しなければならぬ。そして天才は人類の炬火となるためであつて、自己を卑しとし、彼等の貴重なる職責から彼等を離れさせる特殊利益のために節操を賣る樣に人顏に與へられたものでないと云ふ眞理を强く會得しなければならぬ」（註一二）吾人は亦天才の發見が屢〻彼

等の出生時には利用され得なかつたのを認める。然し彼等の發見が彼等の死後に於いて漸く利用されると云ふ事實を認めたからとて、其の事は、彼が生存中にその發見に報ひてはならぬと云ふ理由にはならぬ。又死後初めて夢中になつて賞讃する人々を貧窮や或は、少くとも、不如意の地位に放棄しつづけるときは果して正しい事であらうか。「若しこの點に關して、大なる變化がなかつたならば人智の進歩は反つて不幸であらう」。斷然所信を發表するサン・シモンの言には焰の如き天才學者救濟の叫があつた。遂にサン・シモンは叫んだ。「人類の爲に働く事は實に見事な職業ではないか。如何に崇拜すべき目的であるか。人間はこれ以上神に近づく方法をもつか。誠に、人間にとつては人類文化の弘通と云ふ唯一の目的に向つて彼の感情を向ける以上に美しく且價値あるものは何か。無智なる者、英雄、征服者、人類の蹂躪者の渴を醫すに役立つて居つた不幸と尊夫の源泉が、新智識の獲得に於いてのみ偉大さと光榮とを發見しやうと云ふ大望を抱く人々の無視によつて渴らされる時こそ人類にとつて幸福の時であらう。志操高き人は最早かゝる泉の媚藥には醉はんとしても能はざるに至つた。名譽はアレキサンダーの輩にあらんよりはアルキメデスの輩に生きよ」と。（註一三）

最後に余を稱するサン・シモンは、君を名指す自己に二つの疑問を提示してこの「友の返事」なるものを終つた。曰く

「この計畫は採用されるだらうか。

若し、これが採用されるとしても、人類の現今の害惡を匡正するであらうか。

これに解答を與へるものが「第二の書翰」である。

註一　ヴェイル著、前掲書、二八頁 Weill, op. cit, p. 34

註二　Saint-Simon, Oeuvres choisies vol I. p. 1.2.

註三　Saint-Simon, ibid. p. 2

註四　Maxime Leroy, op. cit, p. 219-220

註五　Saint-Simon, op. cit, p. 5.

註六　ibid, p. 7.

註七　岡島龜次郎氏譯、ベーコン著、ノヴム、オルガヌム九〇

註八　Saint-Simon, op. cit. p. 8, p. 13

註九　Cf. Saint-Simon. op. cit. Vol II. p. 240-241.

註一〇　Saint-Simon, op. cit vol. I. p. 10-11

註一一　ibid. p. 13

註一二　ibid. p. 13

註一三　ibid. p. 12.

五

「第二の書翰」は如何にも物靜かである。彼はその計畫が直ちに實行に移されるのを見たいと云ふ愚かな希望を決して有してゐなかつた。人類に大努力を有してゐる人がこの機會にそれを實行しやうと決心する多少に拘らぬ熱誠ある活動如何に事の成否は懸るものだと常に考へて居つたと云つてゐる。從つて差當り最良の方法としては出來得る限

り問題を明白にする」事が必要である。問題を明瞭にするためには階級利害對立の實狀を說かねばならぬと考へたサン・シモンは先づ階級を三分して順次各階級に彼等の社會的地位を說き聞かせてゐる。

「第一階級は人智進歩の旗の下に行進するもの、この階級は學者、美術家、及自由思想を有する人の全部から成る。サシ・シモン自らはこれに屬してゐる。

第二階級の旗には「革新不可」(Point L'innovation)と書してある。第一階級には決して參加しないすべての有產者は第二階級に屬す。

平等なる言葉に贊成する第三階級は人類の殘餘を包含する。

彼は先づ第一階級に向つて說いてゐる。

余が人類に提出した計畫を打明けた人は皆んな一寸討論すれば自らに贊成して計畫の成功を希望してくれたが、其言葉の裡には暗にこの計畫の成功し得ないと云ふ憂色を含ませてゐた。然し、その根據をさぐつて見るに、若し自分の豫想が眞實であるなら、余の見解に反對するものはたゞ惰力(force d'inertie)にすぎないであらう。それは腦力の麻醉に原因する。

第一階級の諸君は「豐富なる腦力を所有する人類の一部である。諸君は新思想を受入れるに最も吝かでない人類の一部である。諸君は寄附の成功に最も直接の利害を有してゐる。惰力を克服するものは諸君である。活眼を開いて人類の現狀を見たまへ。輿論の王笏は諸君の掌中にある。その王笏を勇敢にとりたまへ」と。(註一)

第一階級に對する彼の言葉は甚だ少ない。と云ふのは、計畫自體が、第二階級に對する彼の說明そのものであつたからである。然し、第二階級に對しては自ら前者と異なる關係が存した。サン・シモンが先づ彼等に說いたものは、有產者と無產者との間に存する鬪爭の必然性に關するものであつた。次いでは兩者の協力を勸說した。即ち曰く

「無產者と比較して諸君は甚だ少數である。どうして諸君の下に彼等が服從すると云ふことになるのか。それは君等の文化の優越が彼等に對して君等の力を結合する方法を與へてゐるからによる。この力の結合といふことが社會狀態によつて常に必らず君等と彼等との間に存在する爭鬪に於いて平素利を君等に得させてゐるのである。」(註二)

然し爭鬪の不利なるは云ふ迄もない、次第に「重要なる發見によつて知識の優秀さを示してゐる無產者を君等の仲間に引入れることは明白に君等の利益である」と。然らば、對無產者の關係は之れでよしとしても第一階級は有產者に對して如何なる態度を持してゐるか。サン・シモンは彼のサロン生活時代の觀察はここに展開してゐる。

「諸君、余は學者、美術家と食を共にすること多く甚だ親しく彼等と交際する中に彼等を觀察した。而して、この人々は、彼等の力作を人類の尊敬の首位に置くために、又彼等の思想の完全な開拓のために彼等に必要な金錢的手段を獲得するために、諸君をして諸君の自利心や諸君の必要とする金錢を犧牲に供しやうと決心するところまでに至らせるであらうと余は確言出來る」と。第一階級の第二階級に對する眞意はかくの如しとすれば第二階級はこゝに提唱されてゐる計畫に應じない限り

一七八九年當時既に階級を形成して居つた彼等の一部がフランスに於て經驗して來た樣な不幸に再び曝露されなければならぬ運命にある。故にサン・シモンは有產者に向つて、「余が諸君に余の云ふ所を說伏せしめるためには諸君が一七八九年以來この國に於いて起つた事件の進行について反省する丈で充分であらう」と論斷した。彼は云ふ。

フランス最初の民衆運動は學者によつて又美術家によつて祕そかに煽動された。其の一揆が成功するや否や彼等は其首領と自稱し自ら先頭に現れ、彼等の自尊心を從來傷けて來たあらゆる制度の破壞を試み、無產者の無智なる頭腦をいやが上にも激動せしめ隸屬の一切の聯鎖を打破らしめたのであつた。彼等は其の欲することをなすに成功した。始めから崩壞せしめる意志を有して居つたあらゆる制度を必然に崩壞せしめた。一言にして云へば『彼等は戰に勝ち諸君は負けたのである』（註三）或る學者美術家は彼等の腹心の兵士によつて殺戮されるに至つてはこの勝利も戰勝者に頗る高價な支拂をなさしめたが、戰敗者である諸君はより以上に災厄を蒙つた。

然し、害惡もその頂を極めると治療は可能になる。第三階級もこれ以上の反抗には會はない。何んとなれば「經驗によつて啓發されて――有產者が財產を有するがためではなく、有產者は財產を所有して指圖するから、有產者は無產者を指揮するのである。まとめて云へば有產者は無產者以上に優越した知識を有するから――と云ふことを認めた學者、美術家は諸君の掌中に社會組織をして正規の活動をなさしめるに必要な權力の一部が納められるのを希望するであらう」からである。無產者は自ら起した飢餓の全部を背負ひ込んで屈服して了つた。かくて、フランスの國民は秩序の回復を熱望したが天才によつてしか社會的に改造される事が出來なかつた。ナポレオンがその任に當つた。革命の結果は明白である。無產者と伍した智識階級も有產者の智的卓越を覺り兩階級の利害は既に調和さるべき機運に達したのである。故にサン・シモンは云ふ、

「諸君よ、この人達と爭ふのは避け給へ。何故かと云へば、諸君が彼等に爭ふ機會を與へる度毎に諸君は敗戰するであらう。諸君は交戰中には彼等以上に苦しみ、而も、平和は諸君に不利益であるだらうからである。學者、美術家及自由思想の所有者が早晩に無產者と聯合する事態を進んでつくる功績を諸君に與へよ。

こゝで寄附し給へ、諸君が脅かされてゐる惡弊を豫防するために諸君の有する手段はこれ丈である。」（註五）と。彼は有產者自らが無產者と第一階級者との提携を自發的に計らんことを希望した事は明白である。

而も、このためには、地球上の文明諸國を一瞥しなければならぬ。歐洲に於いては今のところは、政府のなす所は被治者の一部から少しも反對を受けてはゐない。然し、英國に於ける、獨逸に於ける、伊太利に於ける輿論の狀態を觀察すれば、この靜寂も畢竟するに嵐の前の死せる靜けさに過ぎぬといふことは（サン・シモンには）容易に豫測出來る。一七八九年にフランスに於いて暴露された驚天動地の騷亂の只中に立つて吾人が觀察した徵候は、現今、イギリス人の間にも、ドイツ人の間にあつてすら、心ある觀察者には認められる。隱くす必要のないこの危機、我々が始末しなければならぬ危機を、財政上の政治上の簡單なる變革に變形せしめて、騷亂の爲に全國民が投込まれた困

窮の狀態が國民各自の中最も無智なる者の胸中にさへ、秩序の恢復の希望を生ぜしめる點に至るまでに騷亂の暴虐を味ふことを我々は避けねばならぬ。

かくて、サン・シモンは第三階級に語を移つして彼等の執るべき態度を敎へてゐる。

英國では學者が多い。王よりも學者により以上の尊敬が拂はれてゐる。かくの如き狀態であるから、世人はなべて一通の敎育を受けてゐる。見給へ、英國では都市と田舍とを問はず勞働者は毎日肉を喰ひ、ビールを飲み、よい衣服をつけてゐる」。これに反してロシヤはどうか無智のロシヤでは學者は塵程にも思はれてゐない。彼等が皇帝の怒に觸れると學者は鼻や耳をそがれて、シベリヤに送られる。從つて農民は馬同樣に無智である」、榮養不良で、風采は汚なく、何かと云へば笞刑を受けてゐる。知識の必要なる事は二國に於けるこの甚だしい對照によつてよく知ることが出來る。然るに、現今まで富者は諸君を支配する事のみを仕事として居つた。彼等をして彼等自らの智識を啓發せしめると同時に諸君の敎育に意を注がしめねばならぬ。「彼等は自己のために諸君の腕を働かせ、彼等の頭腦を諸君のためには働かせてゐる。諸君は彼等のために働いて彼等をして無聊に苦しむことなかれしめよ。彼等は諸君に金錢を支拂ふ。諸君はそれに應へるに尊敬を以つてせよ。尊敬てふ貨幣は甚だ高價ではあるが、幸にも最も貧しき者でも些少なりとも所有してゐる。諸君の自由になるこの尊敬を務めて使ひ給へ。かくすれば諸君の運命は急速に改良されるであらう。」（註六）

サン・シモンは無產者階級の無智に鑑みて、先づ智識普及の必要と智識尊敬の肝要なるを示した後、尙詳しく學者の社會的尊敬を充分に受くべき理由の存する所以を說明した。

「學者とは何か。「豫見する人である」。（Un savant est un homme qui prevoit）科學が有用なるものであると云ひ、文學者がすべて他の人々より勝れてゐると云ふのは科學は豫見する方法を與へるからである。我々の知りうる現象は天文學、物理學、化學、生理學の四現象に分類されてゐる。科學專問家とはこれら諸現象の一つに於いて他の人より特にすぐれて研究してゐる人の稱である。例之、月蝕、土地測量、航海術、物質化合の理、病體の診療等は各特殊專問家の發見によるものである。然し、學者は何んでも豫見しうるものであると思つてはいけない。彼等は各自の專問とする所に於いてのみ最も多くの事物を豫見しうるものだと云ふことを知らねばならぬ。而して、學者が學者としての名聲ある所以は實證（verification）によつて豫見するからである。かくの如く今日では實證による豫見が學者の本質とされてゐるが過去に於いてはそうでなかつたのである。こゝまでに至るには相當の年月を必要とした。實證的科學研究時代迄の經過を人智の進步について考察して見るに、人間が組織的方法を以つて觀察した最初の現象は天文學上の現象であつた。人間がこの現象から始めたと云ふのは充分の理由のあるところで、最も簡單だからである。天文學研究の當初に於いては人間は間が觀察した事實を彼が想像した事實と混合して、初步の曖昧な言葉で、出來る丈最善の結合を計り、一切の豫見欲求を充たさうとした。」

然し樣々苦心した結果、今日の「天文學者は最早觀察によつて證明された事實しか許容しない。彼等はそれを最もよく聯契する組織を選定した。そして、この時以來斯學にとつて謬つた進步を決してとらなくなつた。」（註七）

この變轉期、即ち「人智發展史が示す最も記憶すべき時代は、天文學者が占星師を彼等の集團から排斥した時代である。」而して『もう一つ著名なる事實はこの時以來、天文學者は愼深く善良なる人となつて、最早、彼等が知らない事を知つてゐる樣に見せなくなつたといふ事及び、諸君の側から云へば、諸君が星によつて自分等の運命を讀むと云ふ樣な無鐵砲な要求を彼等にすることを止めたと云ふ事である。』天文學と相並んで化學もずつと後ではあるが、同樣にして鍊金術士を放逐した。然るに生理學は今尙、天文學や化學が既に放棄した謬つた立場を擁してゐる。これこそサン・シモンの頗る遺憾とする點である。之の對策として彼は「生理學者は、哲學者、道德學者及形而上學者を、丁度天文學者が占星師を、化學者が鍊金術士を放逐した如くに、彼等の仲間から放逐すべきである」と力說した。然し、サン・シモンは、あながちに、哲學者、道德學者及形而上學者を排斥するのではない。彼の云ふ所に從へば、人間は有機體である。故に我々の社會關係は之れを生理學的現象として考へなければならぬ。一體『哲學者、道德學者、形而上學者の主要なる仕事は物質的と呼ばれ又精神的と呼ばれてゐる現象の間に存する關係を研究することである。』そして「この方面で彼等が成功する時には彼等の研究は生理學的と呼ばれる筈である」。然るに彼等はこれのみでは滿足せずに彼等が觀察した事實を普遍的體系として統合しやうとする。これが大なる謬である。哲學者、道德學者及形而上學者は生理學に貢獻するところ皆無であると主張するのではない。たゞ方法を謬つてかゝる誤謬を犯すからして、我々は占星師が天文學に貢獻したに拘らず、又鍊金術士が化學に貢獻する所があつたに拘らず彼等を放逐しなければならなかつたと同樣に彼等を我々から排斥しなければならぬ理由が生ずるのである。要之、生理學なるものは未だ普遍的體系の基礎となるべき程度に進んでゐない。只、云ひうべくんば「數學のみが普遍的體系の建設に吾人が使用しうる唯一の材料を有してゐる」。（註八）

かくして長く連續した社會の生理學的觀察によつて證明された「事實は各人は其の程度に多少はあるが、すべて他人を支配しやうと云ふ希望を示してゐると云ふことである」。孤立してゐない人、即ち社會關係にある人間は「すべて他人との關係に於いては能働的支配と受働的支配下にあるサン・シモンはこゝで一寸筆を止めて「余は諸君と共に諸君がいたく心を惱ましてゐる事實を研究しなければならぬ」とて有產者優越の理由を無產者に說ききかせてゐる。曰く、「諸君は云ふ『我々は有產者より十倍も、二十倍も、百倍も多數である。然るに有產者は我々が彼等に及ぼすより以上に甚だ大なる支配を我々に及ぼしてゐる』と。余は信ずる。諸君よ、諸君は甚だ謬つてゐる事を。だが然し有產者は數ではいかに劣つてゐても、諸君よりもより多くの智識をもつてゐるといふ事、及び、一般の幸福から云へば智識に比例して支配は分配されねばならぬと云ふ事に注意し給へ。諸君の友侶がフランスを支配して居つた間、フランスに於いて實現された事を考へて見給へ。彼等はフランスに飢饉をつくつたではないか」と。（註九）政權は智識に比例する。この事にして眞理なりとするならば、無產者の政權への進出勞働的支配から能働的支配への轉換は當然智識獲得によらねばならぬ。こゝに於て、サン・シモンの計畫は無產者に對しても重大な關係を有するものとして出現する。智識の進歩は寄附によつて科學的天才を推戴するによつて實現される。かく寄附を實行して科學の進歩が盛

んになれば無智は次第に影をひそめる。無産者の如く自己の教育に僅少の歳月しか捧げ得なかつた人々も、之の氣運に伴つてより多くの智識をうるに至る。從つて「彼等は富者によつて彼等の上に及ぼされる支配部分を減少するであらう」。

然して、この寄附行爲によつて改善される關係はたゞに無産者對富者との關係に止まらない。即ち無産者は富者に對して受働的支配を減じ、能働的支配を增加すると同時に、その增加し得た能働的支配量を更に、自己の選定した有用なる科學者に與へて人類をして更により高い進歩の階段に上らせる役割を演ずるのである。かくして從來「充分正確なる線がつくられてゐなかつた」「一時的利益と永續的利益」「部分的利益と全體的利益」「人類一部の幸福と全人類の幸福」との間には「全人類に共通なる唯一の利益である科學的進歩といふ利益しか存在しない」と云ふ世人の未だ意識してゐない事實を人類に知悉せしむるに至るのである。（註一〇）

サン・シモンは云ふ「諸君の村の村以上の利益を與へると諸君は彼に幻惑されて彼を尊敬する。」然し、かくては利害の反目は靜まる餘地を見出し難い。村は村で爭ひ、「州は州の間に爭ひ、そして國家の間には各　の利益のために戰爭と呼ぶ爭鬪が存在する」。この國家間の爭鬪といふ點に至ると又しても我が道德學者は其の缺點を曝露する。然し、愛國心は國民の利己心に外ならぬ。この利己心は個人の利己心が個人の間に犯してゐると同一の不正を國民と國民との間に犯してゐる」。利害の調和しない人類の努力に於いて、全體の幸福に直接資するものはどの部分であるか。この反問に答へんに實際其の部分は甚だ小さい。然し、この事實は驚くに當らぬ。何んとなれば、全體の利益になる仕事に成功した人々を全體的に報賞する手段を何等とつてゐないからである」。（Saint-Simon, op. cit. P. 28-29）

由來、人間の利己心に關しては激論の存する所である。然し、サン・シモンにとつては問題の解決は既に知られてゐる。そは前言せし如く「個別利害と全體利害とに共通なる道を開く事」に盡きてゐる。彼は利己心を否認しないで承認してゐるが、道德學者の如く矛盾を犯して或時は辯護し、或時は否定するが如き態度は執つて居らぬ。彼は云ふ「有機體の保持は利己心に懸つてゐる。人間の利害を結合しやうとする努力は方向を謬つて居らぬ全である。利害の結合を超越したり、利己心を破壞する傾向を有する道德學者の推理はすべて誤謬の連續である。「道德學者は往々にして事物の言葉尻をつかまへるものである」。

故に、サン・シモンは云ふ「甚だ異つてゐる方面又往々にして相反する方面に活動してゐる諸力をすべて一束に出來る丈統合するためには又人類の運命を改良しうる唯一の方面に、出來る丈すべての力を誘導するためには、余は余が諸君に提案してゐる計畫より以上に良い方策を世人が發見しうるとは信じない」。

「擧つて寄附せよ。諸君、諸君が寄附する金員は如何に少額であつても諸君は甚だ多數であるから金額は可成のものとなるであらう」と。（註一一）然したとへ無産者が彼の計畫に贊成したとしても尙彼等を惱ます一事が存する。

それは選擧方法である。サン・シモンは彼自らが選擧に當つてとる方法を無産者に敎へてゐる。曰く、「余は余の知つてゐるすべての數學者に彼等の判斷によつて最も卓越した三人の數學者は誰れであるかを問ふ。そして、余の相談した人々の間で最も多くの投票を得た人を選定する。物理學者其他に對しても同樣にする」と。

註一　Saint-Simon Oeuvres choisies vol. I. p. 16

註二　ibid. p. 17.

註三　ibid. p. 18.

註四　ibid. p. 19, Not I.

註五　ibid. p. 19-20.

註六　ibid. p. 22-23.

註七　ibid. p. 24-25.

註八　サン・シモンは第三の書翰の二仲に次の如く述べてゐる。「諸君が或る時代に物質の分配されてゐる狀態を知り、そして宇宙のプランを樹て、宇宙の各部分に包含されてゐる物質の量を數によつて指示したと想像して見給へ。このプランの上に萬有引力の法則を適用すれば、數學的知識の狀態が諸君に許す限り精確に、宇宙に於いて引續いて起る一切の變化を諸君が豫言しうるであらうといふ事は諸君の目に明かであらう」と。ibid. p. 41-42

註九　ibid. p. 27.

註一〇　ibid. p. 28.

註一一　ibid. p. 30

六

第一階級、第二階級、第三階級、換言すれば、學者、有產者、無產者各自に計畫は充分說明された。今、再び、フランス革命を回顧して見るに、この革命に於いては、無智なる人の手に權力が委任された結果當然生むべき結果ではあつたが平等の原理が甚だ殘虐な行爲を行つた。そしてそれ以外に、無產者を政治に參與せしめた爲に、給料を受取る治者が甚だ增加し、そのために、被治者の勞働が治者を養ふに殆んど充たなくなり、「最少限に租稅を支拂ふと云ふ無產者の執拗な希望に全く反對の結果」を生じた。

サン・シモンは以上の結果から次の如く推論する事が出來た。曰く「こゝに余の正しいと思ふ考がある。生きんとする最初の欲求は不可避的である。無產者は不完全にしかその欲求を滿足させ得ない。生理學者は彼等の牢乎として拔くべからざる欲求は、租稅減少の希望、或は、それと同樣の結果を生ずる賃銀增加の希望でなければならぬと云ふ事を明白に看取してゐる」と。（註一）社會問題の本體を確保したと云ふ自信に溢れたサン・シモンは遂に彼の全思想を吐露し且つ要約した最後の解決に到着したのである。曰く

「精神的權力は學者の手に、俗世的權力は有產者の手に、人類の最大重要なる役目を行ふために任命される人々を指名する權力は全社會の手に、尊敬を治者の賃銀とすると云ふ制度から社會全階級の幸福を發見し得る」と。（註二）

實にこれこそサン・シモンの思想の全景である。又この思想はすべて大なる變化なしで、彼が後年の著「產業體系」に於て發見せられるものであつた。

以上は諄々として、サン・シモンが人類に說く思想であるが、この淸朗な步調は忽ち破れて突然彼は神と語り出した。「示顯か、夢にすぎぬか、余はそれを知らぬ」と冒頭して彼は語る。

「然し、余が諸君に話したいと思つてゐる感情を余が經驗したことは確かである。

昨夜余は次の如き言葉をきいた。

『ローマは余の教會の主都であるといふ要求を捨てるであらう、法王、大僧正、副僧正及其他の僧侶は余の名に於いて說教することを止めるであらう。かゝる先見なる者を余の代表に任命する事によつて彼が犯してゐる不信に人間は赤面するであらう』と。

その言葉は狂に似てゐるが、僧侶を解任し、ローマの遷都を宣言するに至つては我々はそこにサン・シモンの主張する新宗教が――科學の地に芽生えた宗教――神の啓示に事寄せて昂然と述べられてゐるのを發見する。而もこの狂的思想は「十九世紀科學研究序論」の第二卷宗教論に於ては更に組織的に展開され狂的分子を一切掃除して彼の結論たる「新キリスト教主義」への確然たる道を開拓してゐる。（註三）神は尙言葉を續ける。

「余はアダムに善惡の區別をなすことを禁じた。彼は余に從はなかつた。余はアダムを樂園から追放した。然し余は彼の子孫に余の憤怒を醫やす方法を殘しておいてやつた。子孫が善惡の區別に於ける自己完成のために努力せん事を希望する。然らば、余は彼の運命を改善するであらう。余が地上を樂園とする日も來るであらう」と。

ミルトンの失樂園にも何時か春が蘇生した。サン・シモンの眼には人類の住むべき明るい樂園への道が開かれてあつた。科學實證への道たゞこの道にのみ人類の運命は懸る。神の言葉は尙續く。

「宗教を建設したものはすべて余から力を受けたものであつた。然るに彼等は余が與へた教訓をよく了解しなかつた。彼等は余が彼等に余の神學（ma divine Science）を委任したものと常に信じて居つた。彼等のこの自負心は、彼等をして人間生活の最も細微なる行爲にまで善惡區別の線を引かしめるに至つた。然も彼等は彼等の使命の中で最も必要な部分、余の神的豫見に無限に近づくための最も短い道を人智に追攝せしめる一殿堂を建立するといふ使命を全く等閑に附した。彼等は余の祭壇にある僧に向つて、汝等の率ゆる群衆と賢慮何れとも定かでなくなり、且俗界の權力によつて支配さるゝに至つた場合には余の名を以つて民衆に說く權利を神が汝等から奪ふであらうといふ事を豫告するのを全く忘却して居つた。」

「余は余がニュートンを余の側近においた事、及び余が彼に文化の指導を全遊星の住民の支配を委ねた事とを告げる」と。（註四）

かくて新宗教はニュートンの周圍に樹立される。二十一人の選民即ち各三名宛の數學者、物理學者化學者生理學者文學者畫家音樂家はニュートン評議會なるものを成立する。ニュートンは地上に於ける神の代表者である。

評議會は人類を四分類する。四部分とはイギリス、フランス、ドイツ、伊太利である。この各部は本部と同樣に組織された評議會を擁する。地球上の人間はすべて、四部の中何れか一部に屬し、本部及支部に對する寄附を履行しなければならぬ。

この寄附は男子に限られてゐない、女子も亦寄附に參加する事を許され、女子も亦選出されて科學的天才たるの榮譽を受ける事が出來る。

評議會は三部に分れる。第一部は數學者、物理學者、化學者、生理學者より成り、數學者は議長の席に就く。第二部は文學者、畫家、音樂家より成り、文學者が議長の席に就く。兩部合同の評議

會が開かれる場合には數學者が議長の職を司る。

この評議會はニュートンを祭る廟を有する寺院をつくる。この寺院も亦二つに分れる。

廟を包有する部分は美術家の發明にかゝるすべての方法を盡して裝飾に全善を盡し、他の部分は科學及美術の進歩を阻害した人々の永久に定められた住居はかゝるものであるといふ懲罰的觀念を人間に與へる樣に建設せられ又その目的に副ふ樣に裝飾される。この思想は彼の「新キリスト教主義」に於て再び詳述されてゐる。そこに於いてサン・シモンは祭祀方法の革命を次の如く說明してゐる。曰く

「人々の注意を或る種類の觀念に於て刺戟する爲には、またこれを强くある方向に押進めるには、二種の大きな手段がある。即ち彼等が命ぜられた行爲に違變したから起る恐るべき損害を見せつて彼等の恐怖の念を刺戟するか、或は又彼等が指示された方向に從て行爲した努力から必然的に起つた享樂の誘惑を彼等に示すかの何れかでなければならぬ」。このためには「音樂家は階音に依つて宗教的詩篇を豐かにし、信者の魂に深く浸み通るやうな音樂的特性を與へなければならぬ」

「畫家、彫刻家は寺院に於いて基督教徒の注意を最もすぐれて基督教的な行動の上に引きつけなければならない」。

「建築家は、說教者、詩人、音樂家、畫家、彫刻家が自由に信者の魂に恐れの、或は悅びと希望との感情のみを起させ得るやうに寺院を建築しなければならない」と。（註五）かゝる基礎概念の上に廣大なニュートン寺院は建立され人類救濟の鐘は空高く鳴り響く。而して日頃こゝに參拜出來ぬ者の爲には二年に一度廟は開かれ、堂に籠ることが出來る。子を持つ親は其子が出生後出來る丈早く寺に連れて信者たるの證を立てねばならぬ。從つて、若しこの掟を實行しない人は宗教の敵と認定される。

この外、寺院の周圍には研究所、工場、及大學が建設せられる。大學には、五百冊以上の書籍を決して藏さないことになつてゐる。この限定の理由は推察し難い。前記の評議員の外には、議員補助役として評議員に代る者、祭祀を司る神官、特別の待遇を受ける科學美術の功勞者、聖地保護を任とし且警察會計の事務を取扱ふに聖地守護兵等が各々任命される。

最後にサン・シモンは云ふ、

「人はすべて働くであらう、

人間はすべて余（神）の神智に人智を近づかしむるを目的とする勞働を行ふ工場に附屬せる勞働者として自覺するであらう。ニュートンの本部評議會はその勞働を指揮するであらう。評議會は萬有引力の結果をよく了解せしむるために努力するであらう、この引力こそは余が宇宙を治める唯一の法則である。」（註六）

かくて、平和は評議會の成立と共に歐洲に限り、戰火は其の消息を絕つであらう。アベルの子である歐洲人はカインの末裔たるアジア人を信仰の軍に服せしむるであらう。宇宙王國はこゝに成立する。

註一　Saint-Simon, Oeuvres choisies, vol. I. p. 31-32

註二　ibid. p. 32.

註三　cf. op. cit. vol. II. p. 202-215

註四　op. cit. vol. I. p. 32-33.

註五　サン・シモン）新基督教主義、兼谷美英氏譯、五五頁－五七頁

註六　ibid. p. 38

七

第三の手紙に於いて、サン・シモンは云ふ。

「余に示顯された宗教に於いてはその掟が如何に明白であるかを注意し給へ。その實行が如何に確實であるかを見たまへ。各個の力に人類のために有用な方向を不斷に與へる義務が各人に課せられてゐる。貧者の腕は富者を養ひ續けるであらう。然し、富者は彼の頭腦を働かせて貧者を指圖するを自己の任とする、而も、若し彼の頭腦が働かすに適しないならば彼は彼の腕を働かすことを大いに餘儀なくされるであらう。何人となれば「ユートンは太陽に最も近い遊星の一つである。この地球上に、無益なる特志工場勞働者（des ouvriers volontairement inutiles dans l'atelier）を置かないだらうから」と。（註一）

智能優れたる有閑者は指圖勞働者として、智能下れる無產者は筋肉勞働者として勞力の交換を行ふ工場組織と社會を考へるならばしかく簡にして明なる計畫はない。從つて、この世界に於いて最早有閑者としての富者は其の存在を許される理である。勿論出生による特權は承認されて居らぬ。故に頭腦勞働者としての資格なきものは、有產者たりとも自ら下つて腕の勞働者の列伍に入らねばならぬ。宇宙は萬人が其の能力に應じて頭腦と腕とを働かして協同扶助する一の廣大なる工場である。

第三の書翰は第一の書翰よりは僅かに長い丈で甚だ簡單に終つてゐる。而して同時に「一ヂュネーガ住民の書翰」は終局を告げてゐる。

註一　Saint-Simon, op. cit. p. 40.

八

學者及美術家

無產者

有產者

と云ふ風俗の感情や思想を餘程卓越した、殆んど豫言的な、全く斬新な勞働の優越と光榮とが其樞軸であり、たゞ共同の利益のみを管理する政府が最も有能な人の手に移り、出生の權利で相續はされない社會組織の發表、この發表の下に、學者、發明的美術家、共通信念の受托者、活動家は、彼等の統領たるニュートンの周圍に、恰も、神に祭られたるホーマーの周圍の如く、或は恐らく、サン・シモンの神祕的な祖先たるシャーレマンの周圍の如くに集まる。人類は彼等の周圍に嚴かに殆んど眞情を吐露して當に適用の機至らんとしてゐる。社會秩序變革の一大科學的法則の宣言を聽かんとして集まる。婦人も參加する。婦人の平等少くとも均衡社會機能には婦人の入ることをも許

す原則、そはサン・シモンがたゞ一度しかも明白に述べ、但しその適用に關しては再言して居らぬ原則である。こゝに新らしい精神權力が現れんとし又こゝに新らしい信仰が燃えんとしてゐる。

最高評議會には、有閑者も軍人も席をもたぬ。ボナパルトに媚びぬサン・シモンは決然として叫ぶ。「アレキサンダーの輩よりもアルキメデスの輩に幸多かれ」と、政治問題は悉皆社會問題に變り、世界は神聖なる勞働の工場と化す。」（註一）

吾人がこの小著を讀み終つた時の鳥瞰圖は正にかくの如くである。かくの如きが、この著に於いて言明された一大眞理の要約である。

然るに、サン・シモン選集の論者は云ふ、これらの眞理には主要なる誤謬があると、即ち曰く「權威、出生のアリストクラトに代る科學のアリストクラトへの誇大なる傾向、無智、貧困なる平民を秩序の中に維持すると云ふ見地に於いて、資本と智識の間の公然たる聯合への誇大なる傾向」

「最初の一歩から宗教の統一を豫見するといふことは、ダランベールの弟子にとつては、なみ〳〵ならぬ努力であるだらうが、彼には（宗教の）新らしい性質を了解する事は到底出來なかつた。彼は民衆を抑制し且指導するためにアリストクラティに必要な原動力しか見てゐない」と。（註二）

誠にこの完備してゐる小著には、そこゝに貴族主義の痕跡、傳統的な超自然主義の或る痕跡、殊に、貧困者及無智者に對する大なる不信の色が藏されてゐる。從つて前記の如く、Charles Lemonier が、サン・シモン選集の序文（サン・シモンの哲學に關する甚だ見識のある彼の研究）に於いて、この點を特筆してゐるには充分の理由がある。然しながら、我々はかゝる善惡混交流動の中にあつても尙、善なる要素が惡なる要素よりも優位を占め、且善の要素が水上を殘浮してゐるのを發見する。

蓋し、彼の眞意、換言すれば、彼の求めて居つたものは、民衆に直ちに了解されうる意義を有してゐる何等かのシンボルによつて萬人に分有される事の出來た一つの信仰を宣言する事であつたらしい。エンゲルスが、彼を以つて、一八〇二年に於いて既に階級鬪爭を觀破せる天才として賞讃したるに拘らず、サン・シモンが、この著に於いて自ら發見せる階級鬪爭說を其のまゝにして重要視してゐないのも一つに彼の眞意がより大なるものにあつた事の根據になると思ふ。

今、當時の思想界の傾向を見るに、サン・シモンと時代を同じうした人々は革命の不可避的破壞作用によつて惹起された政治と信仰の錯亂に對して、宗教的簡略方法か哲學的簡略方法か、或は十八世紀の試みた單純化か、シャトーブリアンの傳統的信仰への復歸か、何れか一つを選定しやうとして居つた。此の要求は形式に於いて、又表現に於いては一定して居なかつた朧ろげな宗教的欲求心を形成して居り、不信心者自身すら何等かの宗教的欲求を感じて居つた位であつた。シャトーブリアンは一七九七年、既に彼の著「革命論」に於いて「キリスト教は日に日に頽廢して居る」と云つてゐる。彼はたゞキリスト教の再興をのみ希望して居つたにも拘らず「一宗教が必要である、さもないと社會は滅亡する」と書いて居つた。サン・シモンの感動し易い精神が、かゝる社會的不安を無關心に過す筈はなかつた。彼は信仰と理性との古い戰鬪の中に突入し、科學に於いて何等かの新らしい宗教的熱心を喚起する題目、社會的宗教の自然主義的な要素を發見しやうとして彼の全生涯をこの研

究に奉献したのである。實に、彼の好んで研究對象としたものは單に無產者のみではない、又單に有產者のみではない。學者、無產者、有產者をこめて一丸とした全人類、無產者、有產者との區別が主要でなく、頭腦と腕との區別が緊要な科學的勞働者としての全人類、更に換言すれば、社會的有價値な一切の勞働に從事する勞働者としての全人類であつた。而して、この全人類に一つの新らしい信仰を與へんとするのが彼の職責であつた。然し、思ふに、まだ、この著に於てはサン・シモンの宗教思想は恐らく彼自身にとつても何等具體的に明確な形を整へて居つたと云ふ譯ではなかつた。尙多年の間、宗教は科學の發見と云ふ漠然たる言葉に飜譯さるべき一つの政治法則にすぎなかつた。そして其の間この思想は常に彼の下に進歩し、法則づけられつゝ彼の死に至るまで彼の心、彼の手、彼の思ひを指導して來たのである。

Maxime Leroy は「新文明の註解者たるこの著の重要性をよく了解するためには」他の部分よりも寧ろ「一八四八年以後の社會主義及產業主義の本質が說明されてゐるこの原始的公式に」よらねばならぬとて「萬人は働くであらう。彼等は皆一工場に附屬せる勞働者として自覺するであらう。……各人には人類に有益なる方向を各自の力に常に與へると云ふ義務が課せられる」と云ふサン・シモンの「第三の書翰」中の一句を擧げて次の如き賞讃の辭を與へてゐる。曰く

「此の比較（社會を一の廣大なる工場と見る）は全く斬新である。……こゝに新らしい博愛の宣言勞働者の宣言がある。勞働は聖書の衰頽を奮起させ、神の罵詛を放逐する。サン・シモンは事物必然の理から、勞働を誘導してゐる、宗教としての勞働は自己の法則及自己の必然性、その永久とその將來とを有してゐる。吾人は勞働を研究し、又組織しなければならぬ。而して勞働が普遍化されゝばされる程、有閑者のみが、尊敬されてゐる世界に於いて虐待され又侮蔑さるゝに從つて、愈〻不信心になり又粗野になる人間が、益々、集團として開化され、德化されるであらう」と。（註三）

而して又、彼の世界的寄附の計畫についてもこれは純然たる一空想に止つたのではなかつた。フランスに於ける最も有名な博愛主義者の一人である Charles de Lasteyrie は一八〇一年に Société en faveur des savants et des hommes de lettres と題する小冊子を公刊して居つた。又サン・シモンが大人物のために希望して居つた事、更らに後には自分のために熱望した寄附も、オーギュスト・コムトに對して Littré によつて實現された。（註四）

註一　Maxime Leroy, op. cit. p. 220; Saint-Simon, op. cit. intro. XX-XXI.

註二　Saint Simon, op. cit. intro. XXII.

註三　Maxime Leroy, op. cit. p. 223-224.

註四　Weill, op. cit. p. 38.